

3 第3427号

学術・思想

形象の生成と言語の倒錯と

常識を転倒させるひとつの大胆な前提から出発する書

稲賀繁美

平倉圭 著

▶ かたちは思考する

芸術制作の分析
9・26刊 A5判372頁 本体3800円
東京大学出版会



本書は、常識を転倒させるひとつの大胆な前提から出発する。口で「形象は自己」思考する。これは或いは生気論・物活論の嫌疑を抱きかねない。だがこの発想の転換に、評者は必然を見る。一方で主語述語構造の言語は、常に現実を取り逃がす。ジャック・ラカン定義なら「象徴界」は「現実界」に「言語の網目」を被せるが、そこから零れた残片が想像界の三念と化する。この「象徴」とは意識の側の触手が捉えた「現実」の破片が描く星座 constellation だろう。言語秩序による制御

は意識の表面を繋ぎ止める「留め具」にすぎず、仏教はそこに妄執をみた。他方「人新世」は、地殻表層を覆う極薄の生態圏に生命の揺籃を見る。地殻を覆う海水と大気との循環系「惑星」ラリスの生命体は地球の譬喩ではなかったか。動的平衡の裡に「思考する」流体力学は、反復の内に差異を押し、その写像群は干渉縞(干渉)を宿す。宇宙cosmosは装い cosmeticsへと転写され、両者の微細な距離を源にして「顔」が生起する。象徴的形象とは、その韻律の生々流転

をなすその軌跡は、陸海の開き合いを虚空に反復しつつ垂直の次元へと増幅する。水上 spiral 形象に照り返す陽光は、レンブラントの干渉によつて日蝕の金冠に変貌する。そこには、正四面体の三角錐の爪という観測器具によつて人界と電磁界とに架橋を試みたクラムハムベルの夢想も、重ね合わせとなつて反響する。それを著者は「共鳴」ならぬ「異鳴」と呼ぶ。周波数の偏差が醸し出す「嘘」。空撮用ヘリコプターの旋回翼が大気を斬る。その摩擦音／爆音の裡に discrepancy「異鳴的」なり「発生装置たる earth work」の生起と死の予感で、表裏一体「抱擁」

輪廻転生する姿だろう。本書表紙に取られたローバー・スミソンの《スパイラル・シエッタ》(螺旋旋回) (1970)をこの仮説にそつて分析してみよう。それ自体空想系の破天荒な土木工事が、塩水湖による浸食を見込んだ抽象的形象に結実する。藝術家はこの作品の空撮で、曲藝飛行よろしく四つ葉のクローバー型の経路を提案する。螺旋回転でメトロスの帯をなすその軌跡は、陸海の開き合いを虚空に反復しつつ垂直の次元へと増幅する。水上 spiral 形象に照り返す陽光は、レンブラントの干渉によつて日蝕の金冠に変貌する。そこには、正四面体の三角錐の爪という観測器具によつて人界と電磁界とに架橋を試みたクラムハムベルの夢想も、重ね合わせとなつて反響する。それを著者は「共鳴」ならぬ「異鳴」と呼ぶ。周波数の偏差が醸し出す「嘘」。空撮用ヘリコプターの旋回翼が大気を斬る。その摩擦音／爆音の裡に discrepancy「異鳴的」なり「発生装置たる earth work」の生起と死の予感で、表裏一体「抱擁」

ノンフィクション

寄せる衝迫のintensiveを触知しつつ、その作用に憑依された「顔」の震えを見届けるその刹那に自壊する営み。その供養の瞬間に藝術形象が生成する。後期セザンヌの斜めの筆触。その周波数の同調と干渉とが惹起する可視の振動。沸騰しつつ複数の時間を包摂する凍つていた造山運動。それが禅語の「青山常運歩」としを含まつつ「異鳴」の共振を惹起する。そこには始原も終極もない永遠の現在が、地表の褶曲運動と大気の蠢動とを、画家の筆一筆の筆遣いの反復を通して中動態で描く。不断に落下を続ける滝さながらに更新される、永遠の相。そこに著者は「カンテン ヴィニョンの娘たち」(1907) 右下の仮面に斬首を認め、言語記号学からの悪魔祓いを行なう術の手術台としてこの作品を刻印する。この明察は従来のロザリン・ド・ヌラウスやトウ・プラン・ボワラの読解が越えられなかった自縛性から脱却する位相転換を刻印する。その比喩と融合したマティスの《夢》(1905)あるいは

その屏風仕立てを観る著者は、平面ではなく山折れになった画面の集積と反復／断絶に着目し、固定した理想的な観望地点や距離設定を無効にする布置をその屈曲に認め、従来の定点観測を是とする観照に失効を宣言する。竹橋の国立近代美術館が所蔵しながらほとんど展示されないヒソンの《ラ・ガルプの海水浴場》(1905)。制作過程が逐次映画撮影された本作の「絵画的思考」を、著者は撮影という外因が介入競合した「合生」concoerenceの動態的形象化に定位する。事後、本書は言語把握の臨界へと向かう。言語は何を捉え損なうのか。その熾烈なる実験場が旋回してゆけ……。(国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学・教授／放送大学客員教授)